

平成 16 年度第 1 回 OR 企業フォーラム報告

●テーマ：「標準化の国際的動向と新しい分野でのマネジメントシステム」

講師 財団法人 日本規格協会関西支部 事務局長 中泉 純氏

1 月 21 日 (金) 日本規格協会関西支部講義室

平成 16 年度第 1 回 OR 企業フォーラムが平成 17 年 1 月 21 日 (金) 日本規格協会関西支部において開催され、26 名の出席者があった。ゲストスピーカーは、日本規格協会関西支部事務局長の中泉純氏である。まず、企画コーディネーターの梅沢豊氏の開催挨拶後、梅沢氏の発案により、講演者と参加者の意思疎通を図るために、出席者も簡単な自己紹介を行った。その後、本学会関西支部長石井博昭氏から講演者の中泉純氏の紹介があった。中泉純氏は、JIS や ISO 等の国内規格や国際規格の標準化を推進する団体に所属し規格作業策定の仕事に従事されてこられ、標準化について造詣の深い方である。テーマは「標準化の国際的動向と新しい分野でのマネジメントシステム」である。日本の企業が世界市場を制するためには、いかに国際標準を制するかが重要であるかを数々の具体例により語ってもらった。以下にその概要を報告する。

VHS 対ベータの戦いでは、技術的に優れている方が勝つとは限らず、標準の失敗は市場の損失に繋がった。次世代 DVD 録画方式においてブルーレイ方式と HD DVD 方式の争いがある。ワーナーやディズニー等の映画会社の動向によって決まると考えたが、それが今二分している。標準化を急がずに公益で決まっほしい。標準には「デジュール標準」と「デファクト標準」がある。前者は公的な開かれた手続きによる標準であり、後者は、市場が取捨選択淘汰する標準である。前者においては、元英国首相サッチャーの「ISO や IEC に働きかけて、世界標準化で自国に利益をもたらす」戦略が成功している。日本は、この面で小国であり遅れている。日本の企業はもっとこの面に関心を持ち積極的に国際会合に参加すべきである。後者では、パソコンの OS の Windows 等がある。マイクロソフトは応用ソフトで着々と拡大戦略を展開している。世界第 2 世代の携帯電話標準では、日本は PDC で 1



国、欧州標準は GSM で 111 ケ国、米国標準は IS-54、IS-95 で 13 ケ国である。日本の製品は最も技術的に優れているが、海外戦略では誤算である。また、日本の二槽式洗濯機は、一時はアジアでは強かったが、今や IEC 規格に準拠していないとしてアジアへの輸出は受け入れられなくなり、現地生産となっている。標準化戦略でイニシアティブを握る欧州に負けまいとして、米国が欧州を追撃している。ISO 幹事国業務の引き受け数で米国が増えてきている。日本ももっと貢献すべき。オリンピック競技におけるルール改正で日本がメダル獲得に成功した例は柔道であり、失敗例はバレーボールにスキージャンプである。「ルールが変われば勝者も変わる」を肝に銘じて、日本の企業は、「優れた技術」に加えて、それを「世界標準」にする戦略展開がいる。そのためには、国際標準化とともに、技術開発力強化、知的財産権保護、戦略的経営等に一体的に取り組むことが必要である。また、新しい分野でのマネジメントシステム規格が制定されてきている。マネジメント規格は企業自体の信頼性を支える基盤であり、今後これらの取り組みも益々重要となる。

経営意思決定での標準化戦略の重要性を再認識した、示唆に富んだ非常に内容の濃い講演であり、講演後には質疑応答が活発になされた。

(文責・流通科学大学 野口博司)